

近代／植民地朝鮮の言語空間に生じるダイナミズム A Dynamism of Language Space in Modern and Colonial Korea

柳 忠熙

RYU CHUNG-HEE

東京大学 IHS プログラム 特任研究員

Project Research Fellow of Integrated Human Sciences Program for Cultural diversity of the University of Tokyo

キーワード

植民地朝鮮 植民地近代性 国語 韓国・朝鮮文学 二重語使用者

Keywords

Colonial Korea; Colonial Modernity; National Language; Korean Literature; Bilingual User

Quadrante, No.20 (2018), pp.65-69.

目次

1. 植民地近代性と韓国・朝鮮近代小説『腹／複話術者たち』(2008)の研究史的背景
2. 韓国(朝鮮)語／英語／日本語、帝国／植民地、そして近代
 - 2-1. 英語と国文化の試み
 - 2-2. 国語としての日本語、民族語としての朝鮮語
3. 『植民地の腹話術者たち』と日本の読者たち

1. 植民地近代性と韓国・朝鮮近代小説『腹／複話術者たち』(2008)の研究史的背景

植民地が近代であり、近代が植民地である。これを否定すれば実状が見えず、実状が見えなければ不当と暴力が乱舞する。本書に掲載された小文が試みたことは、韓国語と韓国小説に関するそのような実状を、可能なかぎり白日のもとにさらしてみようということだった。(「韓国語版序文」、13頁)

金哲氏は、韓国において「植民地＝近代」であるという観点を前提とし、「韓国語と韓国小説」の「実状を、可能なかぎり白日のもとにさらしてみよう」という意図で『腹／複話術者たち：小説で読む植民地朝鮮(복화술사들: 소설로 읽는 식민지 조선)』(문학과 지성사, 2008年)を著したと

述べる。その日本語訳『植民地の腹話術者たち：朝鮮の近代小説を読む』には、佐野正人氏がすでに評しているように、植民地朝鮮の言語や小説、そして「裁判や郵便、汽車、コーヒーやランチなどの食べ物、エロティシズム」など、近代／植民地朝鮮を見渡すことができる「パノラマ」が広がっている¹。言い換えれば、本書は、文学や文化史研究の観点から、韓国／朝鮮において植民地近代／性(Colonial Modernity、以下、植民地近代性)がどのように現れていたのかを示すものとも言える。

『植民地の腹話術者たち』を理解する補助線として、まず原著『腹／複話術者たち』がどのような研究史的背景において書かれたのかを確認しておこう。

韓国／朝鮮学の分野において植民地近代性の議論が注目された一つのきっかけは、アメリカの研究者たちによって編まれた『韓国(朝鮮)の植民地近代性(Colonial Modernity in Korea)』(2001)²である。『韓国(朝鮮)の植民地近代性』は、社会や文化、文学、経済、歴史などの諸観点から、植民地朝鮮に見られる近代性を読み取り、各々の風景やその意味について論じている。この本は、従

¹ 佐野正人「植民地朝鮮のパノラマが繰り広げられる知的興奮」『週刊読書人』(2017年4月21日)。

² Shin Gi-Wook, Michael Robinson eds., *Colonial Modernity in Korea*, Cambridge and London: Harvard University Asia center, 2001.



来からの韓国における〈内在的发展論〉と〈植民地近代化論〉をめぐる論争を意識し、両者を批判的に捉え、植民地朝鮮のありようを考え直そうとした試みであった。詳しく言えば、植民地近代性論は、韓国ナショナリズムに基づきつつ〈日帝期〉あるいは日本の植民地という韓国の近代を反省的に捉える前者の観点からも、また植民地期における経済的な発展に注目しつつその経済的な効果を肯定的に捉える後者からも、一定の距離をおいて植民地朝鮮を俯瞰する観点として提示された。同時期の日本の朝鮮学分野においても植民地近代性論が紹介され、植民地期朝鮮を考え直す観点として用いられ議論された³。

キム・ジンソン 金振松の『ソウルにダンスホールを許可せよ (서울에 댄스홀을 허하라)』(현실문화연구, 1999年)⁴、申明直の『モダンボーイ、京城を歩き回る (모던보이 경성을 거닐다)』(현실문화연구, 2003年)⁵など、2000年代の韓国では文化史研究が盛んに行われた。こうした文化史研究の流れは、林志弦の『民族主義は反逆である (민족주의는 반역이다)』(소나무, 1999年)など、韓国のナショナリズムを批判的に再考する1990年代の流れと相俟っている。植民地近代性論は、こうした韓国ナショナリズム批判や文化史研究などの観点と互いに影響し合いながら形成され流通した。

金哲氏は植民地朝鮮の文学や言語に関する従来の考えを再考するという問題意識のもとで『腹／複話術師たち』を著したと言える。この『腹／複話術師たち』は、植民地近代性論や韓国ナショナリズム批判、文化史研究を研究史的背景としており、これらと問題意識を共有するものでもある。

2. 韓国(朝鮮)語／英語／日本語、帝国／植民地、そして近代

『植民地の腹話術師たち』は、近代／植民地朝鮮の「韓国小説」と「韓国語」の実状を提示することを通じて、韓国の植民地経験と近代の問題を考え直すきっかけを読者に与えるものである。評者は、この「韓国小説」と「韓国語」のなかで、とくに近代／植民地朝鮮における「韓国語」をめぐる言語状況に注目する。

2-1. 英語と国文化の試み

本書の第10章で取り上げられている尹致昊(ユン・チホ、1865～1945年)は、約60年間にわたって日記を書いており、その大半が英語で書かれた。尹は、日本をはじめ、中国やアメリカに留学し、日本留学期から英語を学び、『英語文法捷徑』(1911年)、『実用英語文法』(1928年)などの英語文法書や、英語テキストを底本とした『議會通用規則』(1898年)、『우선소리 (笑話)』(1908年)などの翻訳物を著した。尹は朝鮮末期から植民地期にかけての英学を象徴する人物だとも言えよう。

具完書と玉蓮の耳に聞こえるアメリカ人らの話は、「ババ、ババ」と聞こえ、人が話しているようには聞こえない。小説は英語がわからず往来で右往左往する具完書と玉蓮を描写した後、ちょうどその場を通り過ぎた清国の開化人士・康有為の支援で、彼らがワシントンの学校に入って五年で玉蓮が優等生として卒業することになる場面にすぐ移る。つまり、英語が一言もできなかった人間が「英語でやりとり」する状態に達すること、それが文明開化の実際であることを、『血の涙』は明らかにしているのである。(68頁)

近代朝鮮において英語の習得は「文明開化の実際」であり、朝鮮知識人と英語との出会いは「韓国語」の〈近代化〉への始まりともいえる出来事である。具完書と玉蓮の英語習得の様子は尹致昊の英語学習に重なるものでもある。当時の多くの朝鮮知識人たちは海外への外遊を通じて西洋文明を経験し、その際に西洋文明国における英語の言語的権力を実感することになる。

³ 松本武祝「朝鮮における「植民地的近代」に関する近年の研究動向」『アジア経済』43巻9号(日本貿易振興会アジア経済研究所、2002年)、31-45頁。並木真人「朝鮮における「植民地近代性」・「植民地公共性」・対日協力：植民地政治史・社会史研究のための予備的考察」『国際交流研究』5巻(フェリス学院大学 国際交流学部紀要、2003年)、1-42頁。趙景達『植民地期朝鮮の知識人と民衆：植民地近代性論批判』(有志舎、2008年)など。

⁴ 日本語訳は、金振松著、『ソウルにダンスホールを：1930年代朝鮮の文化』川村湊・川村亜子・安岡明子訳、(法政大学出版局、2005年)。

⁵ 日本語訳は、申明直著、『幻想と絶望：漫文漫画で読み解く日本統治時代の京城』古田富建・岸井紀子訳、(東洋経済新聞社、2005年)。

興味深いのは、当時英語を習得した朝鮮知識人に、西洋文明のまなざしをもって朝鮮社会を啓蒙しようとする態度が見られ、その啓蒙の手段として諺文を国文として使用しようとする試みがあったことである。アメリカに留学した徐載弼^{ソ・ジェビル}（1864～1951年）や尹が啓蒙団体である独立協会（1896～1898年）を創立し、『独立新聞』（1896～1899年）を通じて西洋文明に基づいた啓蒙思想や近代ナショナリズムの言説を国文で広げた。と同時に、『独立新聞』の英文版である *The Independent* を発行し、英語で西洋に朝鮮の状況も伝えた。

ところが、本書でも取り上げられているように、これ以前に尹には国文を自分の書記言語としようとして、途中でそれを断念した経験があった。朝鮮の士大夫である尹は、当初は漢文でつけた日記を、中国留学中に国文に変え、またアメリカ留学中に英文に変える。この国文から英文への変更の理由は、国文を用いては、当時彼自身が経験していた世界を十分に記すことができないというものであった⁶。金氏が述べているように、国文使用の挫折にまつわるこの場面は、尹のような朝鮮知識人たちが「わが国の言葉」を自分の書記言語として用いたときの困難の一例である。金氏によれば、この例は「〈韓国語（朝鮮語）＝韓国の国語〉、あるいは〈ハングル＝韓国の文字〉という等式が自明なものではなく、当然のように成立するものでなかったということ」（139頁）、つまり「国語」の形成の人為性と偶然性を示すものである。

こうした開化期朝鮮における「国語」への人為的な試みの一例が『独立新聞』の純国文の文章である。英語を習得した朝鮮知識人たちは、純国文に啓蒙的内容を載せて朝鮮社会を啓蒙すると同時に、自国語と自国文として諺文を再発見し、国文へと再構築していく。この国文に関する試みで参考とされた言語は、おそらく文明／近代の言語である英語だった。

2-2. 国語としての日本語、民族語としての朝鮮語

20世紀に入ると、近代朝鮮の言語空間の位相が変化する。日本が大韓帝国を保護国化し最終的には植民地にしたことにより、日本語の影響力が劇的に増大する。植民地朝鮮においても英語は依然として〈文明の言語〉という位置を維持するが、日本語が朝鮮人にとっての〈帝国の言語〉であり〈国語〉にあたるものとなった。大韓帝国という国の喪失によって、開化期から模索されてきた諺文の国語化は不可能となり、朝鮮語は帝国日本の被植民者の〈民族語〉として位置づけられることになる。日本は、統治のために民族語である朝鮮語の改良を試み、朝鮮人の〈国語＝朝鮮語〉学者たちと共に作業を行っていく⁷。この植民地当局による行政的な朝鮮語改良の流れが存在した一方、金氏が述べているように、李光洙^{イ・グァンソ}（1892～1950年）の『無情』（1917年）をはじめとする韓国／朝鮮の近代文学という場で、朝鮮人文学者たちが民族語としての朝鮮語を用いて近代的な小説や詩などを創作していく流れも存在した。だが、植民地朝鮮における「韓国語」の改良をめぐる言語状況は「あまりにも複雑かつ膨大な主題を包括している」。

漢文、ハングル、英語、日本語などが、単に単語や語彙ではなく、統辞構造の水準で入り乱れ混在する。[中略]このような形態のエクリチュールは、実際に見てみると尹致昊の場合だけに限られない。このことは何を物語っているのか。『尹致昊日記』は、封建体制の崩壊とともに漢文の言語的支配力が失われ、その言語的権力の空白を占めるために競合する多様な諸言語の角逐を示す一つの事例である。この角逐において、「韓国語」はどのように決定され、「韓国語エクリチュール」はどのような過程を体験したのか？（138-139頁）

植民地朝鮮の言語空間には、尹の英文日記に見られる「the agitators are 辱 ing me（煽動者たちは私をなじっている）」（『尹致昊日記』1919年3月4日付）のような混種的なエクリチュール、朝鮮語

⁶ 尹致昊の海外経験と彼の日記における書記言語の変化については、拙稿「近代東アジアの辞書学と朝鮮知識人の英語リテラシー：19世紀末の尹致昊の英語学習を中心に」『超域文化科学紀要』18号（東京大学大学院総合文化研究科超域文化科学専攻、2013年）、85-101頁を参照してほしい。

⁷ 植民地朝鮮における言語政策については、三ツ井崇『朝鮮植民地支配と言語』（明石書店、2010年）が詳しい。

で書かれた小説に混じり込んでいる英語や日本語の表現、そして依然として朝鮮文化の底流に流れながら朝鮮語に影響を与え続けていた漢文的要素などが「入り乱れ混在」していた。植民地朝鮮における「韓国語エクリチュール」は、こうした多言語の競争の空間に生きつづけ変化していた。

いわゆる韓国近代文学の〈暗黒期〉と言われる1930年代後半から1945年にかけての時期には、内鮮一体や〈皇民化〉などの政治的な名目で、国語としての日本語の専用が政策的に行われた。尹をはじめとする多くの朝鮮知識人たちは、こうした日本の政策に賛同する態度を示しながら、〈国語〉で内鮮一体の重要性や戦争遂行の必然性を唱えた。だが、日本は、公的には国語専用を宣伝しつつも、朝鮮人における日本語リテラシー習得の低さという理由により⁸、戦争遂行や朝鮮人の〈皇民化〉などのプロパガンダの効果を得るためには、皮肉にも民族語としての朝鮮語が一層必要となっていく状況に直面する。植民地末期の朝鮮において、〈帝国言語〉としての日本語は、人為的に国語として上から押し付けられたものである自己矛盾、つまり日本語が植民地では〈国語〉として機能していないという現状を自ら露呈してしまったのである。

植民地末期においても、植民者と被植民者のそれぞれの立場としては、むしろ両者の境界が曖昧にならないように、言い換えれば、民族的差異を明らかにするためにも言語の差別化が必要とされ、内地人と半島人との差異を表す特徴として日本語と朝鮮語との差異を維持しておく必要があったかもしれない。金史良（1914～1950?年）の「郷愁」（1941年）を論じながら、金氏は「腹／複話術師」である二重言語使用者の運命を取り上げ、この植

民者と被植民者が持っていた区別の論理を鋭く指摘する。

自らが日本語で叫んでいるという事実さえ意識できないまま、日本語で叫べば叫ぶほど、彼は自らの身内から遠ざかる。かと思えば、自らの言語を理解する帝国の支配者も、やはり彼の行為を理解できずに戸惑っている。植民地における二重言語使用者、あるいは二重言語で作品を書く作家の運命を、これほど正確に象徴する場面が他にあるだろうか。（161-162頁）

ナショナリズムの観点からみれば、金史良と張赫宙（1905～1997年）のように、帝国の言語である日本語と民族の言語である朝鮮語との両方を自然に駆使することができる朝鮮人は、結果的に内地人と半島人両方に受け入れられない存在とみなされてしまう。なぜなら、植民地の二重言語使用者は、近代／植民地という時空を通過しながら形成された国語あるいは民族語、そして国民性／民族性という同質で「自明な存在」に亀裂を入れる存在とみなされ、日本の敗戦と朝鮮の解放後にもその存在自体が排除され忘却されていく。

金氏は、この本を通じて、近代／植民地朝鮮の言語空間に見られる、さまざまな場面に細心の注意を払い、その時代を生きていた朝鮮知識人の群像とその実状を、できるかぎり復元し、今のわれわれに伝えようとしている。

3. 『植民地の腹話術者たち』と日本の読者たち

評者が日本に来たのは2008年春のことだった。顧みると、約10年前の私の日本語能力は、最近のように日本語の単行本をすらすらと読む（そのふりをする）ことができないものではなかった。最近の私は文章を書くとき、おそらく金史良と張赫宙などの二重言語使用者がそうだったと思われるように、日本語で文章を書くときには日本語で考えて、韓国語で書くときには韓国語で考えている。留学当初は韓国語で先に文章を書き、それを日本語に翻訳する形だったので、日本語の文章とは言えない、奇妙な文章を書いて（訳して）いた。今は昔より少しよくはなったものの、日本語を母語

⁸ 朝鮮総督府の官房調査課が作成した「昭和18年末現在に於ける朝鮮人国語普及状況」（『第86回帝国議会説明資料』1944年〔昭和19年〕12月）によれば、1943年現在、朝鮮人の全体の国語普及率は22.2%であり、そのなかで、「国語を少々解し得る者（国民学校四年修了程度）」の比率が9.9%、「普通会話に差支なき者（国民学校六年卒業程度）」の比率が12.3%であった。同資料の〈国語を解する朝鮮人の累年比較表〉によれば、日韓併合の3年後の1913年〔大正2年〕末の0.61%から1933年〔昭和8年〕の7.81%までは朝鮮人における日本語の普及率は10%以下だったが、日中戦争が勃発した翌1938年〔昭和13年〕（12.38%）以降に普及率が10%以上になることを確認することができる。

として幼いときから日本語で作文する訓練を受けてきた人々の文章とは、何か微妙に違う点がある。そして、最近韓国語で何かを書こうとしたり話そうとしたとき、本書に取り上げられた金東仁^{キム・ドンイン}（1900～51年）の小説創作に関する話（19-20頁）のように、日本語の単語と表現が先に浮かび、それを訳するような感覚で韓国語を書いたり話したりする場合もある。このように私の韓国語は日本語の影響を受けていると同時に、私が駆使する日本語もいつも韓国語に影響されている。韓国語と日本語という一国の〈純粋な国語〉という観点からみれば、私が用いる韓国語と日本語は、すでに〈汚染〉された韓国語と日本語と言わざるをえない。だが、この言語的な〈汚染〉は、人によって程度の差があるとはいえ、韓国人でありながら私が日本に身をおき長年にわたってこの社会に生きているなかで起こった現象である。植民地朝鮮と現在とは歴史的な状況や背景はかなり異なるが、私のこの現象が、当時の被植民者であった朝鮮人たちにも同じく起こっていたとは言えないだろうか。それは当時の個々人の言語生活においても、そして朝鮮語の変容にも影響を与えていた。金氏は、植民地朝鮮の言語空間に生きた人々と現在の言語空間に生きる私／私たちに繋がる問題を、本書を通じて示している。

2008年に『腹／複話術師たち』が出版された当時における著者の韓国社会と韓国人読者への問いかけは、先述したように、純粋な国語・文学というナショナリズムに基づいて〈日帝期〉の言語空間を評価してきた従来の韓国社会の観点と解釈とは異なるものを示し、韓国社会におけるナショナリズム的な解釈に対しての再考を訴えるものであった。

原著が刊行されてから約10年間の歳月を経て日本に紹介された『植民地の腹話術師たち』は、はたして日本の読者に何を伝えたかったのだろうか。また、この本を読んだ日本の読者はどのような感想を持つことになるだろうか。日本での刊行の意味を強いて推測してみれば、その著者と訳者の意図は、韓国社会への問いかけと同じく、日本社会における過去と現在の言語空間を再考し、現在の日本語の言語空間に生きるという意味を吟味してみる材料を、植民地朝鮮の観点から示したい

ということではないだろうか。日本の読者たちにも、本書を介して、重層を成している日本語と日本社会の様々な味わいをぜひ吟味していただきたい。